

臨床実地問題 50問(解答時間2時間)

- 1 眼球の組織像を別図1に示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
a ①は二層の細胞からなる。 b ②は虹彩溝である。 c ③は血液房水柵を持つ。
d ④は房水を産生する。 e ⑤は横紋筋である。
- 2 14歳の女子。左眼眼底写真を別図2に示す。
診断はどれか。
a 血管腫 b 傾斜乳頭 c 乳頭欠損 d 乳頭ピット e Bergmeister 乳頭
- 3 16歳の女子。近医で眼圧が高いと言われて来院した。前眼部写真を別図3に示す。
この患者に合併しやすいのはどれか。2つ選べ。
a 外斜視 b 円錐角膜 c 視神経膠腫 d 皮膚色素沈着 e 網膜色素変性
- 4 別図4に示す器具と関連するのはどれか。
a 斜視 b 眼窩腫瘍 c 屈折異常 d 調節障害 e 網膜裂孔
- 5 45歳の女性。最近5年間で右上眼瞼部の腫瘍が徐々に増大したため来院した。外眼部所見と腫瘍の摘出標本の病理組織像を別図5A, 5Bに示す。
正しいのはどれか。
a 男性に多い。 b 全身に転移しやすい。
c 内容物に皮脂や角化物質を含む。 d 筋上皮細胞と腺上皮細胞が観察される。
e 生後間もない時期から存在することが多い。
- 6 角膜内皮細胞密度と年齢の関連について、患者診療録を調べて論文発表予定である。結果を別図6に示す。
正しいのはどれか。
a 介入研究である。
b 倫理委員会に申請する必要はない。
c 角膜内皮細胞密度と年齢には負の相関が認められる。
d 角膜内皮細胞密度と年齢の関連をみた箱ひげ図である。
e 角膜内皮細胞密度と年齢の関連をみるために χ^2 検定を行う。
- 7 3歳の男児。他院から紹介されて来院した。左眼眼底写真を別図7に示す。右眼にも同様の所見がある。
正しいのはどれか。
a 血管の先天異常である。 b 二次癌の発生頻度が高い。
c Eales 病と鑑別が困難である。 d Down 症患者に発生しやすい。
e 片眼症例は、遺伝性発症が多い。
- 8 80歳の女性。5年前から左上眼瞼の腫脹を自覚していたが放置していた。左眼の眼球突出が悪化したため来院した。眼窩単純CT像と摘出した腫瘍の病理組織像を別図8A, 8Bに示す。
診断はどれか。
a 血管腫 b 神経鞘腫 c 多形腺腫 d 腺様嚢胞癌 e 悪性リンパ腫
- 9 眼科用機器の写真を別図9に示す。
正しいのはどれか。
a 電気メス b レーザープローブ c 鼻内を観察する機器
d 眼内を観察する機器 e 涙道内を観察する機器

- 10 8歳の女児。数週間前から左下眼瞼の腫瘤に気づき来院した。前眼部写真を別図 10 に示す。
診断はどれか。
a 霰粒腫 b 線維腫 c 尋常性疣贅 d 母斑細胞母斑 e 伝染性軟属腫
- 11 79歳の女性。3か月前から右下眼瞼縁に腫瘤が生じ、抗菌薬点眼で改善しないため来院した。外眼部写真と病理組織像を別図 11A, 11B に示す。
診断はどれか。
a 麦粒腫 b 霰粒腫 c 乳頭腫 d 脂腺癌 e 悪性リンパ腫
- 12 72歳の女性。左眼の結膜隆起に気づき来院した。前眼部写真と隆起部の細隙灯顕微鏡写真を別図 12 に示す。
診断はどれか。
a 結膜嚢腫 b 結膜乳頭腫 c 結膜リンパ腫 d 結膜扁平上皮癌 e 結膜リンパ拡張症
- 13 34歳の女性。10代の頃から左眼にほくろのようなものがあるのに気付いていたが放置していた。前眼部写真と病変部を切除した病理組織像を別図 13A, 13B に示す。
診断はどれか。
a 基底細胞癌 b 悪性黒色腫 c 母斑細胞母斑
d 角化棘細胞腫 e Primary acquired melanosis
- 14 19歳の女性。眼脂と流涙によるソフトコンタクトレンズの上方移動を自覚して来院した。外国製のカラーソフトコンタクトレンズを使用している。前眼部写真を別図 14 に示す。
適切な対応はどれか。2つ選べ。
a コンタクトレンズの装用中止 b 抗菌薬点眼 c 抗アレルギー薬点眼
d 免疫抑制薬点眼 e 乳頭切除
- 15 55歳の女性。数日前から帯下の増加を認めた。右眼の眼脂と充血および結膜浮腫を自覚し、流行性角結膜炎として治療されたが、症状が増悪するため来院した。初診時の右眼外眼部写真を別図 15A, 15B に示す。眼脂のスミアからグラム陰性双球菌が確認された。
正しいのはどれか。3つ選べ。
a 性行為感染症である。 b リンパ球浸潤が主体である。
c 進行すると角膜穿孔を来す。 d 主感染部位は結膜上皮である。
e アミノグリコシド系抗菌薬の点眼治療を行う。
- 16 68歳の女性。右眼角膜に白いものがあることに気づき来院した。前眼部写真と前眼部 OCT 像を別図 16A, 16B に示す。痛みはない。
適切な対応はどれか。2つ選べ。
a 涙液機能検査を行う。 b 睫毛の異常を治療する。
c 副腎皮質ステロイド点眼を処方する。 d 悪性腫瘍の疑いで専門施設に紹介する。
e 角膜表層切除を行う。
- 17 50歳の女性。感冒後に左眼の視力低下を自覚して来院した。視力は左 ($0.7 \times -0.50 \text{ D} \text{ Cyl} -2.00 \text{ D Ax } 80^\circ$)。眼圧は左 9 mmHg。撮影法を変えた左眼前眼部写真を別図 17A, 17B に示す。
診断はどれか。
a 角膜ヘルペス b カタル性角膜浸潤 c 結核性角膜実質炎
d サルコイドーシス e Posner-Schlossman 症候群

27 35歳の女性。健康診断の眼底検査で異常を指摘されたため来院した。自覚症状はない。初診時の両眼の眼底写真を別図 27 に示す。暗順応後の眼底検査では異常は消失している。

異常を示すのはどれか。2つ選べ。

- a 色覚 b EOG c ERG d 暗順応 e フルオレセイン蛍光眼底造影

28 50歳の女性。眼鏡作製を希望して来院した。眼底写真と OCT 像および Humphrey 視野検査の結果を別図 28A, 28B, 28C に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
b 硝子体手術
c 網膜光凝固
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射
e トリアムシノロンアセトニド後部テノン嚢下注射

29 73歳の女性。1週前から右眼の視野異常を主訴に来院した。視力は右 0.5(1.2× +1.75 D ⊂ cyl-0.75 D Ax 55°)。右眼眼底写真、フルオレセイン蛍光眼底造影写真、インドシアニングリーン蛍光眼底造影写真、OCT 像を別図 29A, 29B, 29C, 29D に示す。眼窩部 CT では眼内に石灰化病変はみられない。

最も考えられるのはどれか。

- a 脈絡膜骨腫 b 脈絡膜母斑 c 眼内リンパ腫
d 脈絡膜血管腫 e 脈絡膜転移性腫瘍

30 60歳の女性。両眼の視力低下を訴えて来院した。初診時の両眼の OCT 像を別図 30 に示す。ステロイドパルス療法を施行し、一旦軽快したが、プレドニゾロン漸減中に網膜下液が増加してきた。

追加治療で誤っているのはどれか。

- a シクロスポリン内服
b プレドニゾロン増量
c アダリムマブ皮下注射
d インフリキシマブ点滴静注
e トリアムシノロンアセトニド後部テノン嚢下注射

31 53歳の女性。2年前から両眼瞼腫脹、2か月前から両眼球突出を自覚したため来院した。矯正視力は両眼ともに 1.2。眼位は正位。眼球運動制限はない。眼球突出度は右 28 mm, 左 29 mm。前眼部と中間透光体および眼底に異常は認めない。外眼部写真と眼窩 MRI 冠状断 STIR 画像を別図 31A, 31B に示す。血液検査では血中 IgG が 3,300 mg/dL(正常 870~1,700), IgG4 は 945 mg/dL(正常 4.8~105)である。

別図 31B の白矢印で示す組織はどれか。

- a 下直筋 b 下斜筋 c 眼窩下神経 d 副鼻腔腫瘍 e 転移性腫瘍

32 4歳の女児。時々右眼が内に入りすぎるのに家族が気づき来院した。出生時、周産期の異常はなく、外傷や先行感染の既往、斜視の家族歴はない。視力は両眼ともに 1.2(矯正不能)。水平3方向眼位写真を別図 32 に示す。

正しいのはどれか。

- a 異常神経支配がみられる。 b 下斜筋過動がみられる。 c 右へ顔を回すのを好む。
d 遮閉治療を行う。 e 筋移動術を行う。

33 6歳の男児。生後3か月頃から目の動きが悪かった。就学前健診で顎上げを指摘されて来院した。眼球運動は全方向に制限されている。父親も同様の症状がある。正面視の写真を別図 33 に示す。

正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 瞳孔不同 b X連鎖性遺伝 c 牽引試験陽性 d 顔面神経麻痺 e Bell現象陰性

34 35歳の女性。左眼の霧視を自覚したため来院した。視力は右1.2(矯正不能)、左0.2(矯正不能)。猫を飼育している。初診時の眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真および1か月後の眼底写真を別図34A, 34B, 34Cに示す。

原因微生物として考えられるのはどれか。

- a *Bartonella henselae* b *Candida albicans* c *Cryptococcus neoformans*
d *Toxocara canis* e *Toxoplasma gondii*

35 58歳の女性。両眼の視力低下を主訴に来院した。視力は右0.4(矯正不能)、左0.1(矯正不能)。頭痛の自覚はない。視野は両眼ともに盲中心暗点。眼底に異常を認めない。眼窩部脂肪抑制ガドリニウム造影MRI画像を別図35A, 35Bに示す。

考えられるのはどれか。

- a 眼窩腫瘍 b 副鼻腔炎 c 甲状腺眼症 d 肥厚性硬膜炎 e 特発性視神経炎

36 42歳の女性。右眼の視力低下を訴えて来院した。視力は右手動弁(矯正不能)、左0.08(1.2×-2.50D)。初診時の眼底写真を別図36Aに示す。

本症例のMRI画像は別図36Bのどれか。

- a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤

37 55歳の女性。眼底写真を別図37A, 37Bに示す。

中心10°内視野測定結果は別図37Cのどれか。

- a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤

38 81歳の女性。自宅で転倒し、左眼を打撲したのち視力低下と眼痛を自覚したため来院した。視力は右0.4(1.0×+2.25D⊂cyl-1.00D Ax 90°)、左0.06(0.1×cyl-3.00D Ax 110°)。眼圧は右16mmHg、左33mmHg。高張浸透圧薬点滴と炭酸脱水酵素阻害薬内服で、眼圧は左18mmHgまで低下した。その後、外来でうつむいていると再度眼痛が出現したが、仰臥位になると寛解した。両眼の散瞳薬投与前の前眼部写真を別図38A, 38Bに細隙灯顕微鏡写真を別図38C, 38Dに示す。

適切な治療はどれか。

- a 白内障手術 b 隅角癒着解離術 c 周辺虹彩切除術
d 線維柱帯切除術 e レーザー虹彩切開術

39 生後9か月の乳児。2か月前に硬膜下血腫の既往がある。両眼の眼底写真を別図39に示す。

考えられるのはどれか。

- a 白血病 b 貧血網膜症 c Terson症候群 d Purtscher網膜症 e 乳幼児揺さぶられ症候群

40 29歳の男性。鉄のハンマーを使った作業中に何かが右眼に飛入し受傷したため来院した。視力は右指数弁(矯正不能)。眼圧は右35mmHg。前眼部写真と眼底写真を別図40A, 40Bに示す。

正しいのはどれか。

- a 眼窩MRI検査 b ベッド上安静 c 前房洗浄 d 緑内障手術 e 硝子体手術

41 後部テノン嚢下注射施行時に使用する器具は別図41のどれか。3つ選べ。

- a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤

42 20歳の女性。1か月前に感冒薬を内服後に全身粘膜のびらんと皮膚の紅斑で救急搬送された。全身状態が安定したため受診した。左眼前眼部写真を別図42に示す。

現状で検討すべき治療はどれか。2つ選べ。

- a 瞼板縫合術 b 羊膜移植術 c 翼状片切除術 d 全層角膜移植術 e 輪部上皮移植術

- 43 72歳の女性。半年前に右眼のFuchs角膜内皮ジストロフィに対して角膜内皮移植術を施行した。数日前から急に見えなくなったため来院した。右眼前眼部写真を別図43に示す。
最も疑わしい病態はどれか。
a 緑内障発作 b 水疱性角膜症 c 内皮型拒絶反応
d 実質型角膜ヘルペス e サイトメガロウイルス角膜内皮炎
- 44 55歳の女性。左眼白内障手術のため超音波眼軸長測定を行った結果を別図44に示す。
採用すべき結果はどれか。
a ㉑25.46 mm b ㉒25.56 mm c ㉓25.72 mm d ㉔25.88 mm e ㉕25.93 mm
- 45 71歳の女性。右眼に多焦点眼内レンズによる白内障手術を希望されている。右眼細隙灯顕微鏡写真を別図45A, 45B, 45Cに示す。眼底には明らかな異常を認めない。視力は右0.3(0.7×+1.50D⊖cyl-0.50D Ax90°)。角膜屈折力は43.00D(5°), 42.75D(95°)。眼軸長は23.02mm。角膜形状解析は正常である。角膜内皮細胞密度は2,412個/mm²。
白内障手術で適正と判断されるのはどれか。2つ選べ。
a 多焦点眼内レンズの適応である。
b トーリック眼内レンズの適応である。
c 非球面よりも球面眼内レンズを積極的に検討する。
d ソフトシェルテクニックを行う必要がある。
e 通常よりZinn小帯断裂に注意する必要がある。
- 46 生後3週の新児。在胎40週、出生時体重2,600g。精査目的で来院した。眼圧は両眼ともに10mmHg。眼底に異常はない。前眼部写真を別図46に示す。
適切な対応はどれか。
a 経過観察 b 眼鏡処方 c 散瞳薬点眼 d 生後2か月で手術 e 生後10か月で手術
- 47 60歳の男性。右眼に対して線維柱帯切除術後4日目で眼圧は18mmHg。この症例で接触型レンズを用いて処置を行う直前の前眼部写真を別図47に示す。
この処置で誤っている組合せはどれか。
a 波長————レーザー光赤色
b 照射時間————0.1秒
c 照射パワー————200mW
d スポットサイズ————200μm
e 合併症————結膜穿孔
- 48 隅角写真を別図48に示す。
白内障手術併用眼内ドレーン(iStent[®])を挿入する場所で正しいのはどれか。
a ㉑ b ㉒ c ㉓ d ㉔ e ㉕
- 49 58歳の男性。1か月前から右眼視力低下を自覚していたが放置していた。2日前からほとんど見えなくなったため来院した。視力は右0.02(矯正不能)。眼圧は右3mmHg。右眼の硝子体手術を予定している。右眼眼底写真を別図49に示す。
手術で最も注意すべき合併症はどれか。
a 角膜浮腫 b 硝子体出血 c 網膜下出血 d 医原性網膜裂孔 e 脈絡膜外腔への灌流

50 64歳の女性。左眼の視力障害を自覚して来院した。視力は左0.03(0.4×-14.00D)。左眼眼底写真とOCT像(水平断)を別図50A, 50Bに示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 硝子体内ガス注入
- c 抗VEGF薬硝子体内注射
- d トリアムシノロンアセトニド硝子体内注射
- e 硝子体手術